

奈良教育大学

令和元年度 陸前高田文化遺産調査報告書



令和2年3月

令和元年度 近畿ESDコンソーシアム

はじめに

奈良教育大学 学長 加藤 久雄

2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による津波は、陸前高田市を襲い1750名以上の方々が犠牲となりました。このことを私たちは決して忘れることなく、「命の守る大切さ」「地域を愛する気持ち」を次世代に引き継いでいかなければならないと思います。

この大震災から今年の3月11日で9年を迎えますがその間、予備調査を含めて本年度で9回陸前高田市文化遺産調査が行われてきました。この調査は、陸前高田市の一市民から文化庁に寄せられた、陸前高田市で被災を免れた文化遺産に対する調査依頼がきっかけとなり、本学の山岸公基教授を中心に、仏像調査をさせていただくことになりました。今回も大切な仏像を何度も手に触れることなく今後も調査できるように3Dスキャナーを用いて調査を行いました。学生たちは、仏像調査を通して信仰する人に出会い、守り伝えていこうとする姿から、その地域の歴史を学ばせてもらう「学びの場」となっています。今年度も陸前高田市の正徳寺、大船渡市の長谷寺の調査をさせていただきました。

もう一つの「学びの場」は、被災地の見学や、被災された方々へのインタビューをさせていただき、防災や減災について考える機会を与えてもらっていることです。今回は陸前高田市にある正徳寺の千葉了達氏から避難所での生活や避難所開設に当たって大切なこと等を話していただきました。また、陸前高田市教育委員会教育長金賢治氏（当時）からは、「子や親を亡くした喪失感は時間が埋めてくれるものではない」だから学校では「子も親も死んではいけない」防災教育が大切になってくるというお話を聞くことができました。

本学の学生は、将来教員として各地で教壇に立ち、防災教育を担っていく立場になります。その時、被災地を訪れ、被災された人々の話を聞いたこと、考えたことは、ESD・防災教育を進めていくうえで大きな力となるものと確信しています。防災教育・文化遺産調査は、本学が推進している、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の一つとして、今後も続けてまいりたいと考えています。

最後になりましたが、調査活動にご尽力いただきました陸前高田市博物館長の松坂泰盛氏、高田松原を守る会の及川征喜氏、陸前高田市教育委員会をはじめ、ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。



目 次

はじめに	1
令和元年度 第8次陸前高田市文化遺産調査報告概要.....	3
陸前高田市を訪れて	濱松佳生..... 8
陸前高田市文化遺産調査団の活動を通して....	坂本和音..... 10
陸前高田市文化遺産調査に参加して	平山あかり..... 12
陸前高田市文化遺産調査を経験して	北 将伍..... 14
陸前高田市文化遺産調査に参加して	村上 朋..... 16
陸前高田市文化遺産調査団を通して	加藤真由..... 18
ESD 子ども用教材「正徳寺」	20
陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (9)	22
岩手県陸前高田市正徳寺 聖徳太子像調査報告書.....	36

令和元年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

次世代教員養成センター 北村恭康

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の復興状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

2. 日時 令和元年9月13日(金) ～ 16日(月)

3. 参加者 学部生 : 坂本和音、北 将伍、平山あかり、村上 朋、加藤真由
 大学院生 : 濱松佳生
 大学教員 : 山岸公基、北村恭康

4. 宿泊地 民宿沼田屋 (陸前高田市米崎町字川内 179-2)

5. 日程・活動

	ESD・防災教育班	文化遺産調査班
13日	<ul style="list-style-type: none"> ・新宮寺(名取市高館熊野堂岩口上 51) 文殊菩薩像拝観 ・熊野那智神社(名取市高館吉田館山 8) 見学 同所より閑上地区を望む ・陸前高田市教育委員会表敬訪問 	
14日	<ul style="list-style-type: none"> ・陸前高田市震災遺構見学(米田小学校、奇跡の一本松、気仙中学校、気仙小学校跡地) 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・吉浜の津波石探訪(大船渡市三陸町吉浜) ・大船渡市津波伝承館(大船渡市大船渡町字茶屋前 7-6 防災観光交流センター内) 	<ul style="list-style-type: none"> ・長谷寺(大船渡市猪川町字長谷堂 127) 阿弥陀如来坐像調査
15日	<ul style="list-style-type: none"> ・正徳寺住職(千葉了達氏)より聞き取り 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館(気仙沼市波路上瀬向 9-1 旧向洋高校)見学 ・津波の気仙川遡上ポイント探訪(陸前高田市横田町友沼) 	<ul style="list-style-type: none"> ・正徳寺(陸前高田市小友町両替 69) 聖徳太子立像調査
16日	<ul style="list-style-type: none"> ・一関市博物館「木造観音菩薩像とその周辺」展見学(一関市巖美町字沖野々 215-1) ・毛越寺(西磐井郡平泉町字大沢)、中尊寺等拝観(西磐井郡平泉町平泉衣園) ・正法寺(奥州市水沢黒石町字正法寺 129) 拝観 	



熊野那智神社より閑上地区を望む



長谷寺：阿弥陀如来坐像調査

6. ESD・防災教育における今回の調査目的について

今回文化財調査をさせていただき正徳寺（陸前高田市小友町両替）が、東日本大震災時、急遽避難所となり150名近くの人々が生活を送っておられたとのことであったので、避難所運営の実際について正徳寺住職の千葉了達氏から聞き取りを行った。それと共に陸前高田市教育委員会教育長金賢治氏からも貴重な話を聞く機会を得た。

(1) 千葉了達氏（正徳寺住職）からの聞き取り

正徳寺は標高40mの高台にあり、津波被害からは免れていた。住職の千葉了達氏は市の職員であったので、災害時は担当地区の住民を正徳寺近くの両替公民館へ避難させることであった。しかし、両替公民館は津波に流されたので、さらに高台にある岩井沢公民館に住民を避難させた。この公民館は100名以上避難してきた人を収容するには狭く、眠ることもできなかった。このような中で正徳寺の檀家さんから、寺の庫裏を貸してもらえないかと申し出があり、3月11日の夕方から庫裏を開放することになった。そこで、聞き取りから以下の2つについて考察を加えていきたい。

○避難所として成り立った理由

・避難してきた人たちは、生後数か月の乳児から90歳以上の人まで、150人ぐらいであった。その中には、水産関係で研修生として来日していた外国の方もいた。

・避難した当日から米を炊きおにぎりを作って配った

と話されている。津波によりライフライン被害が大きいにも関わらず、これらができたのには、水があり、火が使えたことになる。住職は、

- ①山から水を引いている自家水道があった
- ②都市ガスではなくプロパンガスであった。
- ③電気が通じたのは1か月ぐらいたってから
- ④トイレは簡易水洗なので使えた。
- ⑤反射式ストーブを残していた。

などを話された。このことから、避難所としての設備面をみると、

・水がある⇒炊事、トイレが使える
・トイレの数⇒檀家さんが集まることもあり、男子小便器3つ、個室5つあった
・プロパンガス⇒炊事ができる
・反射式ストーブ⇒電気を必要としないので、ライター、マッチ、乾電池などがあれば点く
つまり、ライフラインの重要な水・ガスそしてトイレが確保できているのである。トイレについては、複数あったのがよかったと考えられる。また、寒さが厳しい中、通電を必要としないストーブがあったことも避難者が暖を取るのに役立った。これら4つのことがそろっていたので、150人もの避難生活ができたと考える。現代の生活では災害時停電、断水をすると冷暖房機器、炊事、トイレなどが使用できなくなる。毎年各地で自然災害が発生し、避難所生活・自宅での避難生活を余儀なくされている人々が多数いる。特に問題になると思われるのは、トイレのことである。避難所に指定されている施設のトイレのほか、仮設トイレ、マンホールトイレ等を各自治体が設置あるいは保有していると思われるが、各個人宅においても、断水すればトイレが使えなくなるという前提で、簡易トイレを備蓄するものの中に入れておくべきであると考えられる。

○避難所生活と役割

・自分の家がどうなっているのか見に行かれるが、家も流されすべてがなくなっているのを見て、



千葉了達氏からの聞き取り

がっかりして帰ってくる。

- ・男性陣は玄関の石の上に座って下を向いて落ち込んでいる。女性陣は100人以上の人にどうやって食事を与えようかと考えふまっているの、立ち直りが早かった。
- ・男性陣には焚きつけにする木を集めてきてほしいと、仕事を与えた。
- ・自分たちで仕事を見つけてやってもらった。
- ・食事の当番表、水くみ、トイレ掃除等それぞれの役割分担ができた。

と言っている。これらのことから、人は役割があると動き出し、自分のできることをやり始めていくものであり、一步を踏み出せるものとする。また、大規模な避難所になればなるほど、個人の役割や自分から動くことが少なくなり、ずっと被災者、避難者のままで「～してもらおう」になってしまわないだろうか。そうならないためにも、それぞれが役割を持ち動ける避難所の運営や避難所の適切な規模も考えなければならない。

正徳寺が避難所になってからは支援物資が届けられるが避難所の分だけではない。近所の自宅避難者の分も含まれている。それを避難所の人たちが仕分けをして渡すのである。つまり、家のない人たちが、家のある人たちの分まで仕分けをするのである。誰がする、しないといっているのではない。自宅避難者もみんなと仕分けなどを一緒にすれば、立ち直りが一刻でも早く、前に進めるようになるのではないだろうか。

(2) 陸前高田市教育委員会教育長金賢治氏の話から

金賢治氏は我々が訪問した際 ①「文化財のレスキュー」②「防災教育」③「自助と共助」の3点について話されたが、ここでは②③について掲載する。

学校の防災教育

あの時両親を亡くした子供は22人、片親を亡くした子どもたちは150人ぐらい。突然親を亡くす経験をした。何に苦しんでいるかといえば喪失感。子どもを亡くした親もたくさんいて、喪失感に苦しんでいる。8年たってみんな元気になったのかといえば、元気になったとみられる人もいるけど、みんな言わないだけで昔の街並みを失くしたという喪失感、大切な人を亡くした喪失感もある。町がどんどん生まれ変わっていききれいなものが建ってくるんだが、ただ心の中で失ったもの喪失感だな。心の中で上がってきたり、落ちてきたりしているのかなと思います。喪失感とは時間がたてば薄れてくるかといえば全然違う。時間なんか関係ない。なぜ喪失感の話をするかといえば、ここで災害があって亡くなってから喪失感が生まれる。だから、亡くならないためにこれから何をしたらよいか、これからの大事な話になる。

教員によく話をしているのは、「学校にいる子どもたちを災害から守るだけの防災教育をしていますが」とよく言う。学校にいる時に、地震きた、火事なった時に子どもたちをどう守るかという防災教育を全国的にやっていると思うが、親を亡くした子供のその後の人生を考えると、親がなくなるとダメ。学校にいる間にその子は助かっても親がなくなってしまうたら、助かった子どものその後の人生を考えたら普通に生きていけない。喪失感の中で生きていく。子どもを守るという視点は2つある。

① 学校にいる時の子どもの命を守る。(全国で指導している)

② 親だって亡くなったらダメなんですよ。この子の人生を守るために。

我が子のために親も逃げてくださいますかということが大事ではないのか。それは、この町で親を亡くしたたくさんの子どものを見てきたから思うことである。

学校の防災教育はこの2つの視点が大事ではないのだろうか。

子が親を、親が子を亡くした喪失感、それぞれの今後の生き方にのしかかってくる。だから喪失感を生まないためには、親も亡くならないことであると述べている。学校において「子どもを守る」という考えの中に②の視点からの防災教育はなかったのではないだろうか。災害はいつどこであうかわか

らない。また、家族が一緒とは限らない。そのために防災教育においては、家庭で「災害時の家族の行動」について話し合いを持ち、互いの情報を共有し、命を守る行動をとるようにしていかなければならない。

自助と共助

聞いた話だが、共助 例えば、近所の年寄りに区長さんが声かけて回ってくれてそして高台に逃げてたくさん命が助かったということもある。高田中学校の話だが、揺れの激しい中で、近くの保育所の園児たちが泣いているのを抱っこしながら高台に逃げた。故郷の人たちは、思いやりの心を持ちながら、たくさん命が助かった事実がある。

もう一つの事実があって、ある町の区長さんが家族と一緒に本丸公園に逃げたのだが、だれだれが来てないという話になって、ご主人だけ降りて行って、逃げようと声掛けをしていた。過去にここまで津波が来たことはない。ここまで来たら高田の町は終わりだという話になって、逃げなかった。説得をされていて区長さんは亡くなった。区長さんは共助をしようとして行ったんだけど、逃げようとしない人たちがたくさんいた。それは、油断ですね。ここまで来たことはないから大丈夫だという。一生懸命声掛けをして亡くなった。高田の町のいたるところでそういう事実があったことを聞いている。人のためにやったことでご自身がなくなり、残された家族が出現した。残された家族は、大事な大きな存在であったお父さんを失くした喪失感で生きていく。

私は、仮設住宅に住んでいて、2 部屋隣に亡くなった区長さんの奥さんが住んでいた。私は、学校に勤めていたので帰ってくると、世間話が始まるのだけど、最後は決まって亡くなったお父さんの話になる。「私の父ちゃん人のためにいいことしたんだよね」という確認です。「でも、そんなことをしなくてもよいかから生きていてほしかったの」という言葉がいつものことである。町にはこんな話がいっぱいある。感情も含めて、自助と共助はどうあったらいいのか、すごく難しい。テレビなんかで共助は大事だ。助け合おうとっているが。共助で助かった命はいっぱいある、自助でも助かった人もたくさんいた。自助と共助どうあったらいいと思いますか。困っている人を助けよう 頭では分かる。自助と共助って、何なのか考えることが大事だ。



金賢治氏の話聞く

「自助と共助」確かに頭では分かっているつもりでいたが、「区長さんと奥さん」を「自分と親」に置き換えて考えると、難しくなかなか結論が出ないものとなる。だから、自分事として捉える防災教育が大切である。前述の喪失感を生まれないためにも過去の経験からの判断や大丈夫という思いこみではなく、どのような状況になれば避難を始めるのかをひとり一人が主体的に持つようにすることが、誰もが死なない防災教育を作り上げていくことであると考えている。



正徳寺境内



旧気仙中学校・広田湾を臨む



教室に飛び込んだ車
(東日本大震災遺構・伝承館)

(3) 吉浜の津波石

この石は碑文から昭和8年3月3日に発生した三陸大津波で流れ着いたことが分かる。その重量は8千貫約32トン、吉浜川河口から流されてきたと記されている。その後石は埋められ東日本大震災の津波で再び石上部を表し、津波の威力を後世に伝えるために掘り出され保存されている。吉浜地区は吉浜湾に面しているが、東日本大震災の津波被害では被害家屋4棟、亡くなられた方1名という他地域とは一線を画する様相を示した。それはなぜなんだろうか。手元に「みんなの震災学習テキスト 吉浜のつなみ石」という一冊の本がある。この本によれば、この吉浜地区は、明治29年の三陸大津波で大きな被害を受け、初代村長新沼武右衛門が全民家の高台移転を進めた。さらに、昭和8年の三陸大津波後8代村長柏崎丑太郎はさらに高台移転を徹底し今に至っていることが分かる。県道250号線より海側には民家はたっていない、吉浜漁港付近にも民家はない。

住み慣れた場所を離れたい気持ちは分かるが、高台移転を進めた村長、それに賛同した村民たちの先を見越した行動は、令和になっても受け継がれていたことが分かる。さらに驚くことは、漁港近くに家がないことは、高台から通っているということである。この点も、漁業者ひとり一人の津波に対する防災意識の高さを知ることができる。

津波記念石
前方約二百米突吉浜
川河口ロニアリタル石ナル
カ昭和八年三月三日ノ津
波ニ際シ打上ゲラレ
タルモノナリ
重量八千貫



津波石



奇跡の一本松とユースホステル



及川・松坂両氏から説明を受ける



正徳寺での調査



長谷寺での調査

陸前高田市を訪れて

造形表現（美術・書道）・伝統文化教育専修

修士1回生 濱松佳生

1. はじめに

令和元年度陸前高田市文化遺産調査団として令和元年9月13日から16日にかけて、岩手県を中心に、文化材調査及び防災教育について学んだ。私は文化遺産班に属し、長谷寺、正徳寺の調査に参加させていただいた。今回この調査に参加した理由は、2つある。1つは被災地を見て自分が感じることに何か変化があるのではないかと考えたからである。私は一昨年度の陸前高田市文化遺産調査団に参加しており、今年が二度目の参加であったが2年の経過でどのように変化したかということに関心があった。2つ目は、地域に根付いたお寺での調査に関心があったからである。

今回は2年ぶりに陸前高田市を訪れて感じたことと、文化遺産調査についての2つの観点から述べていきたい。

2. 2年ぶりに陸前高田市を訪れて

前述した通り、私はこの調査団には2年ぶりの参加であるが、この2年で私の中では大きな変化があった。それは2018年の大阪北部地震を経験したということである。私は今まで大きな地震を経験したことがない。阪神淡路大震災の時はまだ産まれておらず、東日本大震災の時は私が住んでいる地域はほとんど揺れなかった。大阪北部地震の時、私は家に一人でいたが、とっさにどういう行動をとるべきか考えられなかった。非常の事態を想定して事前に備えておくことが必要であるというのは何度も聞いて学んできた。しかし、本当にその大事さについて実感したのは恥ずかしながらこのときであったと思う。私は地震の時一人で居て、「自分の身は自分で守らなくてはならない」ということを身に染みて感じた。だからこそ、前もって備蓄品を置いたり、どこに避難するかを決めておいたりするなど事前に考えておく必要がある。



奇跡の一本松と防波堤

調査の中で、陸前高田市の教育委員会でお話を聞かせていただいた。その中で「自助と共助」という言葉が印象的だった。津波が来る中、一度避難できても近所の方を心配して助けに戻り、そのまま行方が分からなくなった方がたくさんいるそうである。他の方を心配する気持ちはとてもよくわかる。戻れば助かる命があるかもしれないが、それで自分が死んでしまえば、悲しむ人がいるということをおぼえてはいけなとおっしゃっていた。これは、本当に難しい問題である。しかし、やはり、まずは自分たちが助かる方法をそれぞれが考えなくてはならない。そのためには、日ごろから全員が自分たちはどのような行動を取るべきなのかを考えなくてはならない。そして私たちは、そのことを子どもたち含む、他の人たちに伝える義務があると感じた。

3. 文化財調査

今回は、正徳寺と陸前高田市ではないが昨年この調査団で伺ったという長谷寺で調査をさせていただいた。まだまだ実地調査の経験は多いとは言えず、このように本物の仏像を調査させていただくことは私にとって貴重な経験である。機材を像の近くで動かす必要があったり、像自体を動かすことがあったりなど、かなり緊張感があった。やはり本物の文化財を扱い調査するというのは本物だからこそ感じるここのできる緊張感や重みがある。

今回の調査では3Dスキャナを用いた。3Dスキャナは調査対象の情報を立体で捉えることができ、写真や計測で得られにくかった情報なども得ることができる。また、データのため全方位から観察したり、加工したりすることも可能である。今回調査させていただいた仏像は、ひとつは人が二人で抱えないと運べないほどの大きさで、もうひとつは持物が別材で作られており運ぶときにはかなり緊張感があった。そもそもお堂の中のおられる仏像を何度も出して調査することは困難であり、危険である。また、今回の像らには剥落などは見られなかったが被災した文化財は剥落などが進んでいるものも多いだろう。このような場合も、やはり何度も調査することは困難である。そのことを踏まえると、一度3Dスキャンをさせていただき調査を行うことができれば、対象の像のデータを立体的に取ることができ、今後の別の調査を行う際にもそのデータは活用することができる。しかし、調査中に何度か機器の調子が悪くなることがあった。私たちが使いこなせていないことや環境との相性が考えられるが、こうした調査法の難しさを実感した。また、私たちが今回調査させていただいたお寺はどちらも地域に根付いている印象があった。お寺の横で書道教室が開かれ境内では子どもたちが遊んでいるところもあった。授業で学んでいるときは、文化財というのはその時代から残っている「もの」という認識が強く、その文化財にどのような価値があるのかという面ばかり見ていた。



正徳寺での調査の様子

しかし、今回の調査で、信仰している人が今も昔もいるということ、またご住職の方と話す中で、その文化財を守り続けている人がいるという「想い」をひしひしと感ずることができた。

4. おわりに

教育委員会の方のお話の中に、「今8年半経って、街や人を失った喪失感が非常に大きい。時間が解決するわけじゃないんだと思う。」というものがあつた。2年前に陸前高田市を訪れたにはまだ低かった防波堤が高くなっていたり、記念館ができていたり町が変化し、徐々に復興しているように見られた。しかし、お話にあつたように心の復興は非常に難しいことである。私たちが行った文化遺産調査が地域の方の心の復興に繋がれば、という思いである。また、実際に被災地を見てその地域の方々の話を聞くという貴重な経験をした私たちは、学んだことを次に生かさなければならない。

また、今回の調査に様々な面で協力いただいた全ての皆さまに感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

陸前高田市文化遺産調査団の活動を通して

英語教育専修 4回生 坂本 和音

1. はじめに

令和元年9月13日から16日にかけて第8次陸前高田市文化遺産調査が行われた。私は防災教育班に所属し、陸前高田市を中心に平成23年3月11日に発生した東日本大震災の震災遺構の見学や震災の被災者の方への聞き取り調査を行い、防災教育に関する学びを深めることが出来た。

まず、私が本調査に参加したいとして考えた理由は自分の目で東日本大震災の被害の爪痕や復興の様子を見たいということである。以前岡山県へ災害支援ボランティアとして被災地を訪れた際に、テレビ等の報道では感じる事がなかった感情や大きな学びを得ることが出来た。その為、今回の調査でも東北地方の地震と津波に襲われた被災地を実際に訪れることで、東日本大震災についての知識を深めると共に、被災地を訪れたからこそ得られる経験をしたいと考えた。

そして、自分自身が教員として教育の現場で防災教育に携わる時には本調査での経験を活かした防災教育を実践していきたいと考えている。

2. 本調査を通じて

本調査を通して三点について学びを深めることが出来た。第一に東日本大震災後の東北地方の復興の現状、第二に震災遺構の重要性、第三に学校現場で出来る防災教育である。

第一の東日本大震災後の東北地方の復興の現状についてだが、気仙沼や陸前高田の街を探索していくと、その進捗は想像していたよりも進んでいないように感じられた。東日本大震災の発生から8年が経過したにも関わらず、現在も海岸沿いでは盛り土や新たな道路の建設などの大規模な工事が



海岸沿いの工事の様子

が継続して行われていた。最も印象に残っているのは海岸沿いを覆う巨大な防波堤である。その高さは10mを越え、町からは防波堤によって海が見えないほどであった。震災当時に津波が町を飲み込んでいく様子を見ていた人から「震災当時はその防波堤よりも高い津波が襲ってきた」という話を聞き、改めてその恐ろしさを感じた。また、震災当時山から削りだした土をベルトコンベアで麓まで運ぶ際に使われていたコンクリートの土台や、盛り土を行っている途中で周りよりも部分的に少し高くなっている土地を見ると、震災が起こる前と比べると復興に拠って町の様子がかなり変化しているということが分かった。海岸線から遠く離れた場所や高台では、続々と新しい住宅や学校が建設され復興が進んでいるようにも見えていたが、海岸近くの土地はほとんどが更地になっていた。このことから、被災地の復興は更なる震災へ向けての対策を行いつつ進んでいるが、やはりまだまだであるということが分かった。

第二に震災遺構の重要性についてだが、本調査では東日本大震災の恐ろしさを知るために震災遺構を数か所見学した。三陸海岸沿いのタピック45や奇跡の一本松、ユース Hostel 跡では当時陸まで到達した津波の高さとその威力を目の当たりにした。コンクリート製の建物がつぶれている様子や津波が到達した地点までの窓ガラスは全てなくなっているマンション、大きな看板に貼られた津波最高到達地点を示す赤い矢印など町の至るところに震災の爪痕があった。多くの震災遺構を見学した中で特に印象に

残っているのは気仙沼市東日本震災遺構・伝承館である。震災当時まで、多くの生徒が通う学校として使われていたこの建物内の教室はその元の姿を想像できないほど震災によって破壊されていた。更に、当時使われていた教科書や机、棚などがそのままの状態で見守られていた為震災が起こるまでの生活も想像をすることが出来た。この伝承館の見学を終えた後も、印象に残った教室の様子を忘れることはできず、資料映像や写真では感じたことのない震災の被害の衝撃を感じる事が出来た。また、海岸沿いの震災遺構や伝承館の見学をしている時には、全国各地から私たちと同じように見学に訪れている人が多く見られた。私は、このように震災当時の状態を保つということは「震災を忘れないようにする為」という目的もあると考えるが「震災当時の様子やその恐ろしさを全国・全世界へ発信する」という役割も果たしているのだと感じた。震災遺構は後世へ震災の恐ろしさを伝えるためにはなくてはならないと思う。また、これらの遺構があるからこそ本調査においても発生から8年間が経過した東日本大震災についての学びをより深めることが出来たのだと考える。

第三の学校現場で出来る防災教育についてだが、本調査の防災教育班の最終的な目的は調査での学びを活かした防災教育に関する指導案の作成であった。その為、震災から学ぶことが出来る教訓を授業でどう生かしていくかということ考えた。その中で最も大きな学びを得られたのは正徳寺の住職である千葉了達氏への聞き取り調査である。この正徳寺は震災当時、付近の住民の為に避難所としての役割を果たし、多くの人々の避難生活を長期間にわたり支え続けていた。防災教育班では、正徳寺への聞き取り調査によって避難所となっていた当時の状況を詳しく聞き取ることが出来た。正徳寺には避難所として不可欠なライフラインが整っていたことや、地域の人々が生き抜くために互いに助け合っていた様子などから避難所生活という経験で得られた教訓を多く学ぶことが出来た。



避難生活中の食事を支え続けた
正徳寺の台所

3. おわりに

本調査を通して以上の三点について学ぶことが出来た。被災者ではない私たちが出来ることは何かと考えた時に本調査で訪れた震災遺構や聞き取り調査から学んだ教訓を多くの人々に伝えることではないかと考えた。子どもたちへ向けて防災教育をするのならば、単に備えるというだけではなくなぜ備えなければならないのか、震災・災害のどんなところが恐ろしいのかという根本的な部分からしっかり伝えたいと考えた。その為に本調査で自分自身が身をもって感じた震災の恐ろしさを伝えていきたいと思う。また、近年では南海トラフ地震の危険が迫っていると叫ばれている中で、このような恐ろしい事態は決して他人事ではなく、いつ自分が住んでいる地域で起こってもおかしくはないのだという自分事に出来る防災教育を教員として現場で実践していきたいと考える。

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修 2回生 平山あかり

1. はじめに

東日本大震災が起こった2011年3月11日午後2時46分、私は地元である宮城県仙台市の小学校で卒業式の予行演習をしていた。震度6強の揺れを経験したが、海からは距離があったため津波被害を意識することはなかった。地震直後は停電のため満足に情報が得られず、数日後に電気が復旧し、ニュースで初めて沿岸地域の被害状況を知った。今でも、宮城県出身であると伝えたと、大震災はどうだったのか人に聞かれることがよくあるが、何と答えたらよいかかわからず戸惑ってしまう。大震災を被災地とされる宮城県で経験したはずなのに、未来に伝えるべき情報をもっていないことが、ずっと心の中にあった。そのような葛藤から、自分の住んでいた地域で何が起きたのか、実際に目で見て知りたいという思いが、今回、陸前高田への派遣を希望した理由の一つである。こういった思いを胸に、被災地の見学と文化財調査を通じて考えたことを述べていきたい。

2. 被災地の現在と人々の思い

私が震災後に陸前高田市を訪れたのは、今回で二度目である。一度目は、私が中学生の時、両親に連れられて奇跡の一本松を見に訪れた。当時、道路は最低限整備されていたが、まだ震災がれきや倒壊した家屋はそのままであり、初めて見る光景に衝撃を受けたことを記憶している。数年ぶりに訪れた陸前高田の空気は朗らかに澄んでいた。震災がれきはなくなり新しい施設が増えて復興のための工事が進む中、一本松だけが時が止まったようにあった。震災前にどんな景色が広がっていたのかは、想像することができなかった。

陸前高田市教育委員長の金賢治氏にお話を伺った。多くの人からの支援を受けて町なみは復興してきたが、いまここにいる人々が一番感じているのが喪失感だという。穏やかな生活を取り戻すにつれ、親しい人や生まれ育ってきた町なみ、思い出の場所を失ったことをあらためて感じるようになったという。この喪失感は時間が経てばなくなるというものではなく、むしろ以前の生活に近づくにつれてふとしたときに思い出してしまう。それが今被災地の人々が一番つらく感じていることだとおっしゃっていた。しかし、悲観だけをしているのではなく、未来に向かう動きも数多くある。コミュニティカフェなどを通じて人のつながりを取り戻そうと活動している方々がいる。また、津波で被害を受けた文化財は全国各地で保存修復のレスキューを受け、被災した46万点の資料のうち22万点が今現在、後世に継承していける状態になりつつあるという。

陸前高田には新しく津波伝承館や道の駅がオープンし、人々の往来も増えてかつての賑わいを取り戻しつつある。失ったという思いは消えることはない。しかし、そのことだけに目を向けるのではなく、これから何を得るのかということを考える人々の動きがそこにあった。

3. 文化遺産調査

今回の派遣の大きな目的である仏像の調査は、大船渡市の長谷寺如来坐像、陸前高田市の正徳寺聖徳



奇跡の一本松

太子像を対象に行った。私たち学生は、山岸先生のファイバースコープ調査や写真撮影の補助を並行しつつ、主に 3D スキャンの作業をした。3D スキャンとは、対象に複数のレーザー光を照射し、反射して帰ってきた光との位相差から対象の点までの距離を測り、その点をいくつもつなぎ合わせて対象の形を 3D データとして記録するものである。3D データとして仏像を記録することの利点は、最初にデータさえとってしまえばその後は非接触で調査ができること、肉眼ではわからない細かな凹凸がわかりやすくなることなどが挙げられる。私にとって 3D スキャンを実際に調査に用いるのは今回が初めてであり、操作やスキャナの機嫌取りなどに苦戦した計測となった。操作が難しくても文化財の安全を第一に考えて行動しなければならない。神経を使う作業であったが、文化財調査の基本を学ぶことができた。

持ち帰ったデータは部分的なものをつなぎ合わせ、処理をしたのちに初めて使える三次元のデータとなる。今回は 3D プリンターで如来座像と聖徳太子像の造形出力をした。実際のものよりも小さいサイズでの出力となったが、造形は完全に同じ複製である。このように、データを画面上だけで用いるのではなくモノにすることによって、複製した文化財を実際に手に取ってみたり、動かさない文化財を教育現場で教材として用いたりすることが可能になる。人類みんなの財産である文化財を、いかにして多くの人に触れてもらうか。その答えが少しだけ見えてきた気がする。

4. 子供用教材の作成

奈良に戻ったあと、記録した 3D データや写真をもとに、今回調査した陸前高田市の正徳寺聖徳太子像についての教材を作成した。教材のねらいは、自分の住んでいる地域の文化財の価値を知ることによって地域を大切にすることを育み、自分が育ってきた土台を認識してもらうことである。

教材を作成するにあたって私たちが大切にしたいのが、仏像そのものに対して価値づけをするのではなく、正徳寺の歴史や周りの環境と、仏像という形あるものが相互に作用しあって価値が生まれるということである。例えば、正徳寺聖徳太子像にはこんな言い伝えがある。むかし、陸前高田の砂浜に漂着していた聖徳太子像を家に持ち帰った人の夢枕にこの像が現れ、正徳寺に行きたいと話したそうだ。その人はそのとおりに像を正徳寺に寄進し、現在までここに安置されている、といったものである。このような言い伝えは聖徳太子像に限ったものではなく、様々な文化財においてモノとともに大切に伝えられてきた例が多い。今回調査した仏像が素晴らしいものであることは間違いないが、それとともに地域との結びつきを感じさせるようなストーリーがあるからこそ、今まで信仰され、大切にされてきたといってもいいのではないかと考える。

陸前高田市の小中学校に配布される教材によって、このような価値やそれを大切にしている人がいることを子供たちに知ってもらい、自分の生まれ育ってきた地域や文化財を誇りに感じてもらうことが私たちの願いである。

5. おわりに

今回の調査・見学を通じて、自分の知らない被災地を実際に目で見て、学ぶことができた。陸前高田のように大きな被害を受けた地域があり、私には私が経験した大震災があることも理解した。文化遺産調査を通じては、震災前から変わらず大切にされてきたものがあることを知り、様々なアプローチから地域に貢献できることを学んだ。このことをふまえて復興のために一体何ができ、私の被災の経験をどのような方法で未来に伝えることができるか、考えていきたい。

最後に、陸前高田市の皆様をはじめ、今回の調査でご協力いただいた多くの方々に、感謝を申し上げます。ありがとうございました。

陸前高田市文化遺産調査を経験して

社会科教育専修 2回生 北 将伍

1. はじめに

2019年9月13日から16日にかけて、私は陸前高田市文化遺産調査団として、東日本大震災の被災地の見学や、仏像の調査を行った。防災教育班と、文化遺産班に分かれており、私は文化遺産班に所属し、他3人の班員と共に活動した。今回の調査では震災から8年を経た被災地の現況を学ぶことができた。文化遺産調査では普段、社会科で学ぶのみでは得ることのできない経験を多くすることができた。以下では、その詳細について記す。

2. 被災地を見学して

被災地の見学について、今まで防災教育や震災についてさほどの知識のなかった私にはとても衝撃的な内容であった。まず驚いたことは震災の被害の実態の大きさ、凄まじさである。震災が起こったころ私は小学生で札幌市に住んでいた。地元ではそれほど被害が無く、テレビ越しに見る被害も非現実的で想像がつかなかったため、今回初めて東北での被害の実態を現地で知り、いかに大変なことであったのかを今更ながら恐怖した。実際の遺構を見たり、被害に遭われた方の話を伺ったりすることで鮮明なイメージとして学ぶことができた。この鮮明なイメージ、実際の情景は誰かに伝える際にとっても重要なものであり、多くの人が共有するべきものだと思う。

そして、このような震災が自分の身の回りに起こったらどうするかということを考えた。震災ではどこに、どのように避難をするかで大きく明暗を分けることがあったことを知った。特に本来であれば助かっていたら、他の誰かを助けようとして巻き込まれて亡くなってしまった人の話は逃げる際の教訓としても、実際に起こったこととしても深く考えさせられるものであった。教員としての立場に立つと、自分の身もだが生徒のことをやはり守らねばならない。緊急の状況で果たしてどのように動けるのかを防災教育を通して考え続けること、自分の身の回りの土地についてしっかりと把握し、子どもたちに危険性や対策を周知させておくということを徹底しようと思った。

震災から8年経った今でも倒壊した建物や不便な生活が残っており、被災地はまだまだ復興が進んでいないということがひしひしと感じられた。また建物や住環境のようなハード面だけでなく、被災者の心理的な面での負担も未だに残っている。たった数年の支援で復興が終わるということではなく震災復興への応援や努力は人々の心からすぐ忘れ去られてはいけないことなのだと思い付いた。私は今まで復興の現状をよく知らず、どこか他人事のように感じていたが、この気付きを得て、何か自分からできることがあるのだろうと考えた。復興の現状を知り続けることはもとより、それを誰かに伝えたり、積極的に復興活動に参加したりすること（簡単どころだとその地域の物を買うような行動から）が必要だ。今回の学びを糧にして、震災を他人事ではなく自分事として捉える意識を持つことができた。

3. 文化遺産調査を通して

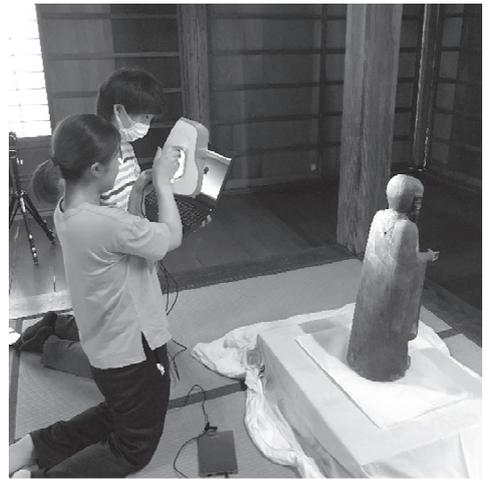
私は社会科教育専修で日本史や文化史に興味を持っているが、仏像など文化財にも非常に興味があり、今回の調査に参加した。大きな目的は、文化財の調査を通して普段では得られない学びを身に付けること、そして、学校教育における文化史教育を豊かにするヒントを得ることであった。今回の調査を通して、どちらの目的もよく達成できたと感じる。

まず前者について、今回の調査では3Dデータについて深く学習することができた。3Dデータはその3Dスキャン専用のカメラを用い対象物を撮影。パソコン上に表示されるデータを加工することで扱うことができる。これにより対象の文化財その物をデータとして記録するので、安全で繊細な観察や調査ができるようになるのである。また大学にある3Dプリンターを用いれば石膏像として縮小版ではあるが出力が可能で、精緻な複製品を作ることも可能である。実際に3Dスキャンからデータの加工、出力までを学生が主体で協力して行い完成させた。自分たちで普段使うことのできない3Dの機材を用いて調査を完了させるという貴重な経験は、このような企画に参加しなければ得られなかった学びである。また知識として、3D技術を用いた文化財の保存・活用方法があるということ、身を持って学べたこともまた良い経験であった。

後者について、今回の3Dデータの意義がまさに文化史教育を充実させるものであると思う。3Dデータは、文化財をデータ上で安全に調査ができるということのみでなく、文化財をデータという形で保存し、未来へと引き継いでいくことができることにもその意義がある。それは過去からどのように文化財が受け継がれてきたかを振り返る指標でもある。社会科歴史の授業において文化史は、ただその物の名前や時代を暗記することに終始してしまい、文化とは何かという本質に触れられていないことが多いと感じる。しかし、その学習の中に3Dデータなど科学技術を用いた手法や文化財がいかにかに今に伝えられ後世に遺せるかという視点を加えることで、文化をただ覚えるだけではない学びができるのではないだろうか。

4. おわりに

私は今回の調査に参加し、実に多くの学びを得ることができた。それは私が将来、教員になったとしても確実に役に立つ知識であり、また、現在学生の身としてもこれからの大学でも学びに大いに寄与するものである。「百聞は一見に如かず」というように、学びは本やテレビで見たり読んだりするだけのことと、実際に行って感じることには大きな差がある。今回、被災地に初めて足を運び、見た風景はこの先忘れることができないだろう。そして、現地で優しく私たちを迎えてくださり、様々なことを教えてくださった方々への恩もまた忘れられないことだ。今回の経験を更に学びを深めるための足掛かりとし、これからも「百聞は一見に如かず」を励行していきたい。



聖徳太子像をスキャンする学生



3Dデータとしてスキャンされた聖徳太子像（部分）

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修 一回生 村上朋

1. はじめに

2019年9月13日から16日にかけて、陸前高田市文化遺産調査に参加した。主に防災教育班と文化遺産調査班に分かれての調査であり、私は文化遺産調査班の一員として活動した。東日本大震災の被災地の訪問、文化財調査はどちらも私にとって初めてのことであり、とても貴重な体験となった。

2. 被災地訪問

今回は震災から8年たったの訪問となった。仙台空港から陸前高田市に向かう道のりでところどころ海を望むことができた。とても穏やかな海がどこまでも続いていた。だからこそ、この地にあの大津波がやってきたということは想像もできなかった。しかし、現地に到着し奇跡の一本松や新しく造られた12メートルの堤防を見ると、そのことが本当なんだと実感することができた。同時に、着実に復興へと進んでいるのだと嬉しくも思った。しかしそんなに甘くはなかった。仮設住宅がまだ残っていた。震災から8年たった今でもまだまだ完全に復興したとは言えない現状に強く胸が打たれた。そして、現地の方々の話を聞いて、この地にも私が今住む町と同様に人々の営みがあり当たり前の生活があったということ、それが一瞬にして失われたことを痛感した。また失われたのはモノだけでない。心もだ。お話のなかで、みんな表に出さないだけで大きな悲しみが心のずっと深くにある、という言葉があった。この言葉を聞いてハッと



新しく造られた高さ12メートルの堤防

したのを今でも覚えている。心に大きな闇を抱えながらも、いまここで強く生きている人がいることは絶対に忘れてはいけない。また被災地の現状について報道される機会が減っているなかで、被災地の今をこの目で見て知れたことはとても貴重であった。

3. 文化財調査

今回は、大船渡市にある長谷寺の阿弥陀如来坐像と陸前高田市にある正徳寺の聖徳太子立像の二つの像の調査を行った。私は陸前高田市に調査に行く前に経験も知識もない中で自分は何ができるのだろうかかと悩んでいた。しかし、実際に文化財に触れ調査が進んでいくと、どの場面も新鮮でわくわくした。調査は主に3Dスキャナを用いて行った。3Dスキャンを行うことでデータとしてその文化財を保存することができ、後世に伝えることができる。またこのデータは公開することもでき、国民の宝としての文化財を様々な境界を越えて、多くの人に知ってもらう機会にもなる。こういったことから、3Dスキャンという技術は文化財保存にとっても、これからの社会にとっても有用であると考えている。

実際の調査は、時間が十分に取れず迅速な作業が求められた。また気温が高かったこともありスキャナの誤作動などもあった。このような予期せぬ事態もあったので、どんな場面でも臨機応変な行動が求められた。今自分ができることは何なのかを常に考えていたように思う。

また、今回調査した仏像の詳しい文献はなく、調査を行ってみて分かることの方が多かった。このような文化財調査にとって、経験が大切であると実感した。したがって、今回の調査に参加できたことは

これからの私にとって大変貴重なものとなった。そして、今回得た学びは次回以降の調査に活かしたいと思う。

4. 子ども向け教材の開発

今回の陸前高田市の正徳寺聖徳太子像の調査をもとに陸前高田市の小中学生にむけて教材の開発を行った。教材開発のねらいは主に、子どもたちに陸前高田市の文化財を知ってもらい、アイデンティティを高めることである。グローバル化が進む社会のなかで、色んな文化を受け入れ認めることはこれから生きる子どもにとって重要だと考えている。また、自分の地域について文化財を通して知ってもらうことで文化財に興味をもってもらうこともねらいとしている。教材制作にあたり、分かりやすく自分たちの考えを伝えることは思っているよりもはるかに難しかった。しかし、文化財を保存し、次の世代に伝えることは私たちの使命である。この教材を通して文化財に触れ、さらに次の世代に伝えていってほしいと思う。



3D スキャナを用いた調査風景

5. おわりに

私は今回の調査に参加したことで、次に被災した文化財や文化財の防災について学びたいと思うようになった。そこで2019年10月26日に行われた京都国立博物館主催の『文化財を守り伝える東日本大震災から8年の今、これから』というシンポジウムに参加した。当時の文化財レスキューの報告や被災地の現状、これからの課題について知ることができた。

5. おわりに

このシンポジウムに参加して印象に残っていることがある。講演者の一人であった加藤幸治教授のお話にあった「その文化財の地域の中での意味合いを伝えることも大切なのではないか」という言葉である。今回、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪れたが、そこに遺構としてある高校は水産系高校であったと後から知った。三陸海岸に面する地にあったこの高校はきっと地域と深いつながりがあったのではないか、その関わりが被災したことでどうなってしまったのだろうかと考えた。もちろん津波の被害や現状を伝えることは重要である。しかし、こういった地域との関わりにも目を向けていかないといけないと痛感した。

今回の調査に参加したことで、震災や文化財について深く知ることができ、そして更なる学びの場に参加することもできた。今後も文化財調査に積極的に参加するとともに、その文化財と地域との関わり、文化財の防災についても学んでいきたい。

今回の調査に参加したことで、震災や文化財について深く知ることができ、そして更なる学びの場に参加することもできた。今後も文化財調査に積極的に参加するとともに、その文化財と地域との関わり、文化財の防災についても学んでいきたい。

陸前高田市文化遺産調査団を通して

社会科教育専修 1 回生 加藤真由

1. はじめに

2019年9月13日から16日にかけて私は陸前高田市文化遺産調査団の防災班として参加した。その際に東日本大震災で被害にあった地域の今を考え、見るということを行った。これは私にとって貴重な経験となった。

2. 8年後の現地を訪れて

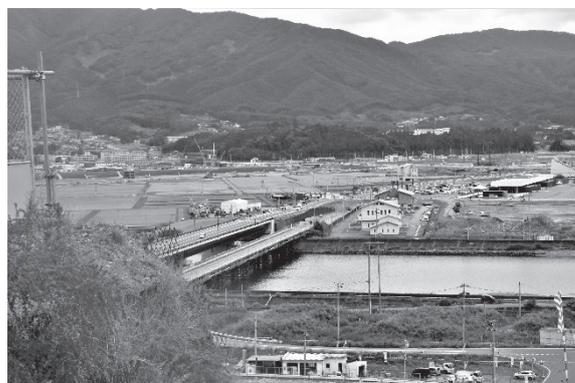
2019年は東日本大震災から8年が経過している。8年という長い期間のように感じるが、震災の痕跡をまだまだ感じる部分があった。さらに、現地にはそれまで私が想像していた「復興」という言葉の意味とは違った「復興」の現状があった。今回の活動の中でも特に印象に残ったことが3つある。

1つ目は現地で求められていることは人々の心のケアであるということだ。それは大人だけでなく子どもも同じである。陸前高田市教育委員長の金賢治氏にインタビューを行った際に「昔の街や子ども、親など失ったものはたくさんあるが、どれだけ時間が経過しても関係なく喪失感が残っている」と述べられていた。また、正徳寺でインタビューを行った際には住職の千葉了達氏によると「震災の前後のことを思い出せない子どももいて、やはり長期的な心のケアを行わなければならないと感じた」と話された。8年が経過して町の様子は写真と比較して随分と変化していたが建物が建ち始めていた。私は建物が建ち始めれば「復興」であると考えていた。しかし「復興」はそう目に見えるものではなく、人々の心が立ち直ることができたときに初めて言えるものなのだと学んだ。喪失感が消えるものではないからどうすれば喪失感を減らすことができるのか考えていくことも必要であると感じた。

2つ目はみんなが生き延びることの難しさである。

避難すれば生き延びることができるけどどこかで甘く考えていた。しかし、避難しただけでは不十分であり、例えば感染症対策や冷暖房の設備といった環境を整えることで生き延びることができることを学んだ。だから避難所だけでなく各自でも環境整備ができるように普段から備蓄しておくことがより重要になるのだと痛感した。また、災害時は情報が錯綜するため、自分たちで手に入れようとしなければ必要なことは自分たちに届かない。それは避難した人だけでなく、ボランティアをしたいと考えている人にも同様のことが言えると知った。

現在はSNSが普及しているため今の情報が手軽に手に入りやすくなったと考えていたが、誤って昔のことや事実とは違うことも拡散しやすいため自分が受け身として得た情報を鵜呑みにして行動することは危険であり、本当に今の情報なのか考える必要があると感じた。避難所で生活する前に、避難することの難しさがあった。自分で避難することが重要でありこれを自助と言うが、全員自助ができるわけではない。中には油断してしまい、そのまま避難せずにいる人もいる。そういった人たちに声をかけてみんなで避難しようとするということが共助である。共助をしようとして亡くなった人がいるという話を伺った。そしてその人の奥さんは今も旦那さんを失った喪失感があるそうだ。一体、何が自助でどこから共助になるのだろうか。いざ、自分がこの立場に立ったとき、どちらを優先するべきなのだろうか、自助を優先することができるのだろうか。中には油断ではなく、自らの意思で避難しないと決めた人もいると思う。その人を助けるためにも共助を心掛けるべきなのだろうか。この話を聞いたとき上記のよ



現在の街の様子

うな疑問がたくさん浮かんできた。しかし答えはいくら考えても出てこなかった。金氏は「子どもに自助と共助を考えさせる機会をつくることも大切な防災教育である」と述べられた。しかし子どもだけでなく、大人も考える機会をつくるのが一番の理想であり、必要なことである。そのために行動していかなくては自分なりの答えは見つからないと実感した。

3つ目は防災には様々な形があることである。今回の陸前高田市文化遺産調査団の活動を通して私は防災のイメージが大きく変化した。物を備蓄しておくといった形として目に見える防災と家族会議や災害にあったときに自分はどうするか考えるなどの目に見えない防災があると感じた。一般的に前者を中心に行っている人が多いように思う。私の実家も前者が中心になっている。しかし、大切なのは後者の方ではないかと思う。私の想像であるが、避難した時に家族がどこにいるのかや自分がいる場所のイメージなどの眼に見えないものは心強いものになると感じた。実際に、役割がある人の方が立ち直りが早かったという話も伺った。だからこそ、子どもに防災教育をする際に後者の重要性を感じてもらうことが必要になると理解した。

3. おわりに

現地を実際に見ることで得た知識がたくさんあった。この活動を一回生のうちにできたことはとても貴重な経験であった。「復興」はこれからも続いていくが、東日本大震災を知らない子どもも増えてくる。実際に教員になったときにそのような子どもに対してどのように東日本大震災での教訓を伝え、全員が助かるためにどうすればいいのか考えるための防災教育を実践できるように、これからの大学生活で今回得た知識を深めていきたい。



地域の人によるポスター

しょうとくたいしぞう 聖徳太子像

について



Q 約430年前っていつごろ？

A 本能寺の変や豊臣秀吉が天下統一を達成した頃で江戸時代の少し前になるね

Q 阿彌陀如来ってどんな仏さま？

A 極楽浄土と呼ばれる全く苦しみのない場所に、生きるものすべてを救い、ここに迎えるとされる仏さま。「南無阿彌陀仏」と唱えるだけで救われるとされているよ

Q どうして一緒に安置されているんだろう？
⇒中の「きほんデータ」で確認してみよう！

学校 _____

年 組 名前 _____

しょうとくたいし
聖徳太子とは？
うまやどのみこ
厩戸皇子ともいわれ飛鳥時代(592年～710年ごろ)に活躍した
すいてんのう せつしやう
推古天皇の摂政として蘇我馬子と政治を行う
ぶつみやう
・仏教を日本に取り入れ、広く伝えた

しょうとくたいしぞう
聖徳太子像って？
にほん ぶつみやう ひろ
日本に仏教を広めた人としてお釈迦さま、もしくは観音さまの再来として信じられ、信仰されてきたんだ

しょうとくたいしぞう
聖徳太子像にはいくつか種類があるよ！
なむぶつたいしぞう
南無仏太子像



しょうとくたいし
聖徳太子が2歳の時の姿だよ
お釈迦さまが亡くなった日にお祈りしている様子
じやうはんしん
上半身は何も着ないで袴を身につけているよ
(元興寺 HP <https://gangoji-tera.or.jp/watch/buddhai.html>)



しょうとくたいし
聖徳太子が16歳の時の姿だよ
お父さんの用明天皇の病気が治るようにお祈りしていた時の様子
みずら かみかた
美豆良という髪型で柄香炉というものを持っているよ
(元興寺 HP <https://gangoji-tera.or.jp/watch/buddhai.html>)



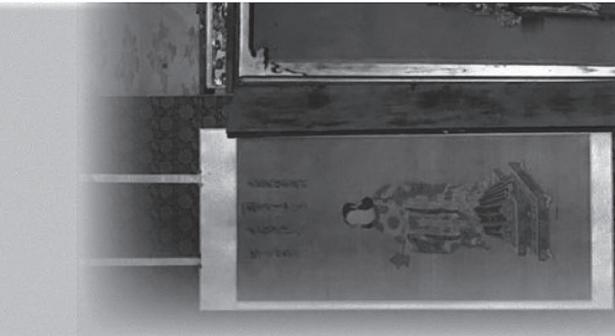
しょうとくたいし
聖徳太子が摂政をしている時の姿だよ
摂政として政治をしている時の様子
しやく ほんまが
笏という木の細長い板を持っているよ
しょうとくし
正徳寺の聖徳太子像はどれに似ているかな？
(法隆寺 HP <http://www.horyuji.or.jp/garan/syoyoin/>)

しょうとくし 正徳寺

について



かんぽうざん しょうとくし
岩峰山 正徳寺
しょうとくし
正徳寺は陸前高田市小友町に位置
しんしゆうおおたには じいん
する真宗大谷派の寺院です。
やく
今から約430年前に建てられたとされています。
もつと たいせつ しんごう
このお寺で最も大切な信仰の対象として安置されているのは
あみだによらいぞう
阿彌陀如来像と呼ばれる仏像です
また、この仏像が安置されているのは
お堂は阿彌陀堂で、気仙大工の建築技術が活かされています。
このお堂には、聖徳太子像と親鸞聖人絵像と一緒に安置されています。



「つくりかた」の面をうらにして1番左の黄色い線にそって合おりにする
1番石の黄色い線にそって合おりにする
まんなかの黄色い線を谷おりにして★の面を折りこむ
できあがり！

きほんデータ

いったえ

りくぜんたかた すなはま なが
むかし 陸前高田の砂浜に流れ着いていたこの聖徳太子像を見つけた人が、
家に像を持ち帰ったんだ。ある日の夜、その家のあるじの夢に聖徳太子像が
あらわれ、「正徳寺」というところに行きたいと話したというよ。
あるじはそのとおりに聖徳太子像をこのお寺に
奉納したという言い伝えが残っているよ。

夢に聖徳太子像が出てきて話しかけられるなんて、とても驚いたろうね。

かみかた

○髪型

なが かみ みまよこ ねは なが
美豆良という、長い髪を耳の横で束ねた髪型をしているよ。
聖徳太子が生きていたころの貴族の男性の髪型だよ。
この像は一部を束ねずに垂らしているね。



いしやう

○衣装

お坊さんが身にまとう 袈裟である、袈裟 という服を着ているよ。
この像が身にまとう袈裟は、ぎざぎざになっているね。
袈裟の下には、赤い袴（まきスカート状の衣）を着ているよ。

かか

○お顔

切れ長の目、シャープな
顔立ちをしているね。
横から見ると、すこし
うつぶわいしているように見えるね。

えごころ

○柄香炉

お祈りの道具を
持っているよ。

☆聖徳太子と親鸞（しんらん）

しょうとし しゅうは
正徳寺の宗派である 真宗大谷派は、鎌倉時代に
“親鸞”というお坊さんが開いた 浄土真宗という
宗派の一部だよ。親鸞は、聖徳太子が日本のお釈迦様であると
信仰していて、和讃という歌にもよんでいるんだ。
聖徳太子を信仰しているのは、真宗だけではなくて、
他の宗派のお寺で聖徳太子像が祭られていることも多いよ。



親鸞

（奈良国立博物館データベース）

3D計測

○3Dデータってなんだ？

ふうせう こうけいひん ふんかざい
仏像や 工芸品などの 文化財を 3D スキャナーで 計測して、パソコンなどのデジタル
データとして 記録したもののことです。写真のように 平面で記録するのではなく、
奥行きのある 立体で記録するので、全方位からデータ上で観察が可能になります。
またデータなので、コピーしたり加工したりということも簡単にできるようになります。

○どうして3Dデータで記録するの？

①文化財に触らずに調査ができる

データとして記録することで、文化財そのものを傷つけたり動かしたりせずに
修理や調査ができるということ。科学の力によって新たな発見が次々と生まれています。

②未来のために記録ができる

私たちが目にする文化財はただ1点しかありません。文化財をデジタルデータとして
記録することで、盗難や火災の危険性や地震などの自然災害に備えることができます。
そして、デジタルデータなので基本的に劣化せず、後世まで記録を保持することができます。
この記録は、私たち人類にとって価値のある文化財を後世まで繋げていくための
方法の1つなのです。

○3Dデータの作り方



①像を撮影しやすい
場所へ動かします



②3Dスキャナーで
計測をします



③パソコン上で撮影した④バラバラだったデータを⑤付け合ったら完成です
データを加工します



陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (9)

ー ハザードマップの情報から防災を考える ー

坂本 和音
(奈良教育大学 英語教育専修)
加藤 真由
(奈良教育大学 社会科教育専修)
北村 恭康
(奈良教育大学 次世代教員養成センター)

The Ninth Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in
Rikuzentakata City
—Thinking about disaster prevention from the information of the hazard map—

Kazune Sakamoto
(Department of English, Nara University of Education)
Mayu Kato
(Department of Social Studies, Nara University of Education)
Kyoyasu Kitamura
(Teacher Education Center for the Future Generation Nara University of Education)

要旨: 陸前高田市文化遺産調査を実施して今年で8年目になる。聞き取り調査からは、正徳寺(避難所)の生活では、各自が役割を持ち活動することは、早く立ち直ることもつながることや、避難所として成り立った条件等を確認することができた。本稿では、ハザードマップを批判的に読み取り、そこから得られる情報をもとに各自の家の防災を振り返る「自分事としての防災」を提案する。

キーワード: 持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development
ハザードマップ Hazard map
避難所 Shelter

1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成に向けた、持続可能な開発のための教育活性化プロジェクトの一環として、岩手県陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで8年目となる。2019年度は、本学教員2名、学部生6名からなる調査チームで、9月13日～16日にかけて、文化遺産調査班とESD・防災教育の研究開発班の2班に分かれて活動を行った。主な日程は表1の通りである。

2011年3月11日に発生した東日本大震災で多大な被害を受けた陸前高田市は、反省や課題を整理して、災害に強いまちづくりのため『陸前高田市東日本大震災検証報告書』(以下、検証報告書)を2014年に発刊した。その中で、一次避難所67か所のうち38か所が被災したことが記されている⁽¹⁾。今回聞き取り調査に協力いただいた正徳寺(千葉了達氏)は小友町両替地区の高台にあり

浸水被害は免れ、急遽避難所としての役割を果たすことになった。

聞き取りを行った正徳寺を始め、出会った被災者全員が「誰も死んではいけない」ということを述べていた。そのため、各家庭に配られて災害に対して最も身近にある情報源のハザードマップを通して考えることとした。

ハザードマップを取り上げた実践例として奈良県川上村立川上小学校5年の事例(2019)がある⁽²⁾。この実践は1959年の伊勢湾台風の被害を知ることから始まり、総合的な学習の時間に村内をフィールドワークし情報を集め、手作りのハザードマップを作り、村民に防災、減災についての意識を持ってもらうというものである。

自治体から配布されているハザードマップから情報を読み解くと共に、現地を歩き、自分たちの住んでいる所の様子を知ることが大切なことである。また、聞き取りや協働作業を通して人とのつながりも図られると考える。しかし、注意する点は、子どもが住んでいる所が、ハザ-

ドマップでリスクが高いと示された子どもへの配慮である。鈴木らは(2015)「重要なのは、居住地を始め、自分とのかかわりのある場所にどのようなリスクがあるのか理解することです。そのような地域は、住んではいけない地域でもないし、住みづらい地域とも限りません。あくまで、特定の災害に対してリスクが高いと想定されたのに過ぎないのです」と述べている⁽³⁾。指導者は危険箇所の指摘に留まることなく、危険箇所を知り、命を守る行動ができる人に育てるのを忘れてはならない。

また、小学校で地域を知る、ハザードマップを作るなどの活動は総合的な学習の時間で行う場合が多いが、時間数が年間 70 時間と限られている。学校によっては他の題材もあるので、時間の調整は無論のこと、特に教科横断的なカリキュラムを作り上げなければならない。

本稿では、正徳寺の千葉良達氏からの聞き取り調査から学んだことを中心に、現在使用されているハザードマップについて記載されている情報を読み解くとともに、記載してほしい情報や工夫すべき点はないか等を批判的に見ていきたい。そして、災害時、誰もが悲しむことのないよう「普段から自分ができる防災」について考える小学校教材について報告する。

表1 4日間の主な日程

	ESD・防災教育班	文化遺産調査班
13日	・新宮寺(文殊菩薩像拝観)、熊野那智神社(関上地区を望む) ・陸前高田市教育委員会表敬訪問	
14日	陸前高田市震災遺構見学 ・吉浜の津波石探訪 ・大船渡市津波伝承館	・長谷寺阿弥陀如来坐像調査
15日	・正徳寺住職より聞き取り ・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学 ・津波の気仙川遡上ポイント探訪	・正徳寺聖徳太子立像調査
16日	・一関市博物館見学 ・毛越寺、中尊寺等拝観(平泉町) ・正法寺拝観	

2. 正徳寺への聞き取り

今回聞き取り調査に訪れた正徳寺は陸前高田市小友町両替にある(図1、写真1)。寺伝によると1593年了玄により開基されたといわれている。了玄は千葉信綱を名乗っていて、源頼朝の奥州藤原氏の攻略の従い陸奥に下りこの地に定着したといわれている⁽⁴⁾。現住職は千葉了達氏で現在陸前高田市役所に勤務している。もともと正徳寺は開祖が建てたときから今の場所にあったわけではなく、最初は同じ箱根山の麓の金谷と呼ばれた場所にあり、何度か火災にも見舞われている。十三世了英(天保9年,1838年死去)が標高40メートルの現在の地を切り開き、本堂や鐘楼、庵室、瓦屋などを建立した。その際に

海から吹きつける風をまともに受けないように少し窪地とし、まわりには防風林を設けた。息子である十四世了随(嘉永4年,1851年死去)は蔵や長屋、厩を建てた。このうち今も残っているのは本堂と蔵である。



図1 正徳寺の位置● 国土地理院1:25000に加筆



写真1 正徳寺から海を臨む

2.1. 避難所の生活

地震が発生した直後、住職の千葉了達氏は市の職員でもあるため、担当地域の集落の人たちに呼びかけ、避難所まで誘導を行った。その後自宅の様子を見に戻ったが、その途中の様子も含めて聞き取りを行った。

表2 千葉了達氏からの聞き取り

- ・避難先の岩井沢公民館は、10 畳間 2 つぐらいの大きさに 100 名以上いたので寝られない。
- ・檀家さんから寺の庫裏をかしてもらえないかという話があった。その夕方から庫裏を開放する。
- ・ご近所さんに来てもらって炊き出しをもらった。
- ・ご近所から使わない毛布などを集めてもらって、とにかく寝て、体を休める。
- ・ろうそくなどを使いながら、最初の晩はおにぎりを作ってもらった。
- ・正徳寺にいた人は大体 150 人越えと分かった。部屋だけでなく廊下でも寝ていた。
- ・年代だけではなく、国籍もいろいろ混じっていた。
- ・正徳寺にはいくつか設備が整っていた。
- ・自家水道があった。山から水を引いていた。そのおかげで水不足がなかった。
- ・プロパンガスであった。(都市ガスならばライフラインが途切れると使えない) 煮炊きもできる。

- ・電気が通じたのは1か月ほどたってから。
- ・トイレは簡易水洗なので使える状況だった。
- ・寺からは海が見えないということが良かった。
- ・防災関係で、曲がりなりにもその後うまくいけたのは、それぞれに役割を持ってもらったこともある。
- ・翌日自分の家がどうなったのか見に行かれるのだが、すごくがっかりして帰ってくる。
- ・玄関の石の上に男性陣は座って下を向いて落ち込んでいる。
- ・百何十人の人にどうやってめしを食べさせようかと考えていた女性の方が立ち直りが早かった。
- ・男性にも仕事を与えた。何とか少しずつ動いてもらうことができた。
- ・ここは避難した人たちで回していける規模であった。
- ・しかし、避難所でも大規模になればなるほど個人の役割がだんだん小さくなっていく。
- ・大きな避難所よりは自立してできた。大きな避難所はやってもらうことが当たり前になっている。
- ・役割がないと人は弱い。
- ・3日後から自衛隊による食料の配給が始まった。
- ・災害対策本部に行ってから、市内の被害の状況が分かった。
- ・物資の振り分けは、必要数が集まっていない時点で分け始めるのは厳しい。
- ・必要数をそろえてもっていかなければ、そこで被災者同士のいらぬ争いを起こしてしまう。
- ・ボランティア疲れもあった。ボランティアを受け入れること自体にも疲れが発生する。
- ・例えばボランティアを受け入れるための水、トイレなどの設備設置もある。
- ・自分たちだけでは進まないこともあるので、ボランティアの人にいろんな作業をしてもらって進んだこともたくさんある。

正徳寺は当時、寺の庫裏を避難所としていた。人数が当初150人を超えていたことから部屋だけでなく廊下にも人が寝ていたとあるが、お寺であるため畳が敷き詰められていたので疲れのとれ具合や冷たさがフロアの避難所とは違いよかったと述べていた。しかし、今回はこの千葉了達氏へのインタビューから特に以下のことに注目したい。

- ・自家水道があったこと。
- ・プロパンガスであったこと。
- ・トイレが簡易水洗であったこと。
- ・反射式ストーブを残してあったこと。

つまりこれは避難所の設備についてである。市で指定

されていた避難所があったにもかかわらず、正徳寺にたくさんの方が避難してきた背景には了達氏が述べたように、広さと設備に関する前述の4点がそろっていたことが大きいと考えられる。正徳寺のトイレの数は男子トイレが3つ、個室が5つであった。150人の避難者(男女比は不明)がいる状況で使用上のルールはつくられたものの、大きな混乱とまではいかなかったのは、内閣府が示す被災状況下でのトイレの個数の目安(女子30人につき1基、男子60人につき1基)を満たしていたからであると考えられる⁵⁾。

これを個々のライフスタイルから考えると、断水や停電になれば炊事やトイレ、冷暖房機もが使用できなくなる。直接被害にあわなくても断水や停電は起こる可能性もある。このようなことから、正徳寺には上述の4点が偶然にもあっただけと考えるのではなく、日ごろから各家庭がローリングストックの考えに立ち食料や水などを家庭内備蓄するのが大切である。さらにトイレも使えなくなるという前提で簡易トイレの備蓄も大切であると考えられる。

3. ハザードマップについて

了達氏への聞き取り調査から正徳寺が、その施設設備の充実さがゆえに避難所として大きな役割を果たすことができたということが分かった。すると、市が公表している避難所の情報では人数とスペース、設備の問題で緊急時には不十分ではないか、もっと住民たちに知らせるべき情報があるのではないかとすることに気が付いた。そこで、地域住民に災害情報を発信しているツールの一つであるハザードマップを例に挙げてその疑問点について考えていく。

3.1. 現在使われているハザードマップの分析

まず現在使われているハザードマップに注目した。各自治体から発行されている中で、今回比較をしたのは奈良県御所市・大阪府大東市・兵庫県朝来市・岩手県陸前高田市の4つの自治体である⁶⁾。それぞれの地域で懸念されている災害や地域ごとの実情の違いによって、異なる形態のハザードマップについて考えることができた。

まず、東日本大震災後作成された陸前高田市の避難マニュアルでは、見開きで避難の情報、地震・津波・洪水・土砂災害などの備えについて記され大変見やすい。避難マニュアルの裏に各地域ごとに分割したハザードマップを入れるようになっている。しかし、非常持ち出し品は列記してあるが、家庭での備蓄品については記載がなかった。この点、比較をした他市とは違い津波を念頭においてハザードマップを作成している。このことは、検証報告書でまとめられた教訓を載せ、「避難とは命を守る行動」と目につくように記載し避難する重要性を訴えているところからも分かる。

ここで4市のハザードマップで共通している記載事項をまとめると下記ようになる。

- ・避難場所（一次及び二次）
- ・要援護者（要配慮者）施設・警察署と交番・消防署
- ・市役所・病院（災害医療機関）
- ・河川の氾濫や津波発生時の浸水深予想
- ・土砂災害警戒区域・急傾斜地の崩壊警戒区域・土石流警戒区域・地滑り警戒区域
- ・災害発生時や防災に関する情報
緊急ダイヤル、非常持ち出し品、災害用伝言板、
防災情報の伝達経路、非常時の警報の種類とそれ
に応じた取るべき行動、家庭で出来る防災対策の
例

共通している記載事項を見ると、市内の公共施設・土砂災害警戒区域・浸水深等が書かれているということが分かる。また、公共施設については各自治体で使用されているマークは異なっていたが、凡例が地図の周りに分かりやすく書かれており、誰が見てもどのマークが何を表しているのかが分かるように工夫されていた。土砂災害警戒区域についてはそれぞれの災害の種類ごとに色分けをされているので、自分が住んでいる近くで起こると予想される災害を特定することができる。浸水深についても想定水深が0.5m未満から3m未満まで細かく区切った色分けがされている為、災害発生時の町の浸水被害の様子を想像することができると考えられる。

また、御所市と大東市のハザードマップでは更に共通している記載事項があった。

- ・緊急時の交通路
- ・ヘリコプター臨時発着場

これらの2つの市のハザードマップに着目すると災害に関する詳しい情報がかなり多く記載されていることが分かる。特に大東市ではこれらの情報が冊子にまとめられている為、読むだけで災害について深く知ることができる。

御所市のハザードマップの難点は一枚の大きなポスターにまとめられているということである。情報がかなり多いため、ポスターは裏表になっており家庭で貼りだされる時にはどちらか片面しか見ることができない。表には市内の一部の拡大地図が描かれており、全体図ではわかりづらい避難所や要介護者施設などの施設の位置が示されている。一方で裏面には緊急時ダイヤルや避難時の準備物などが詳しく書かれている。両面ともに重要な情報なのだが、どちらか片面しか見ることができないため、大東市のように冊子で配布して全ての情報を常にみられるようにすると市民にとってより活用し易いハザードマップになると考えられる。

また、朝来市と御所市で共通していた難点は地図や公共施設や避難所を表すマークが小さく見にくいということである。特に河川周辺では、似たような色のマークが重なってしまいかなり見づらくなっていた。

ハザードマップの縮尺から見ると御所市は市内全域を1枚に表し分割していないため、縮尺が1/20000となり、各人の住宅の位置や避難経路などが分かりづらい。それに対し分割にしている大東市は1/5000、陸前高田市・朝来市は1/10000であり、住居の位置や避難経路、避難場所が分かりやすい。また、この縮尺の大きさは、防災学習においてハザードマップから地域を俯瞰し情報を読みとったり、避難経路をたどったりするのにも適している。また、自分のいる場所が見つけやすく、フィールドワークをして地域の様子を知るのにも見やすく使いやすい。

3.2. 避難所生活と情報

このような現在の様式のハザードマップの内容について更に詳しく考察するきっかけとなったのは了達氏による「水はお寺に古い井戸があって助かりました。」という言葉である。この言葉で、現在のハザードマップには市内の情報だけではなく避難後もしくは災害発生後に必要な情報を更に盛り込むべきなのではないかと考えた。

例えば、避難所に関してである。現在のハザードマップに書かれているのは上記の共通点から一次・二次避難所のみであるが、実際に災害が起こった時には命を助けるための咄嗟の判断が重要となる。実際、仲村・櫛・上田（2018）では東日本大震災の際には学校教員の咄嗟の判断で津波から逃れることを最優先にし、学校の避難ガイドラインの二次避難所とは別の場所へ子供たちと一緒に避難して全員助かったという事例が報告されている⁽⁷⁾。特に、海岸沿いや大きな河川がある地域では災害として地震だけではなく津波の恐れも予測される。その時に最も大切なことは「高台へ逃げること」である。現在、盛り土の工事が進んでいる岩手県陸前高田市沿岸の工事現場でも津波が来た際には高台へ逃げるように誘導する看板が多く立てられていた（写真2）。行政側はこの看板のようにどこへ逃げるのが安全なのかを明確に示す必要がある。また、市民側はこのような行政側からの情報提供に対して、積極的に知ろうとする姿勢をもつことが、災害発生時の咄嗟の判断を手助けし多くの命を救うこと



写真2 工事現場に建てられた看板

にもつながると考える。

3.3. 避難所の備蓄品

災害時、ライフラインの確保は最も必要なものである。その中で、千葉了達氏の言葉からもわかるように井戸は重要な役割を果たすが、水道が止まったトイレも避難所や家庭では深刻な問題となる。

東日本大震災では3日以上仮設トイレが来なかった自治体が66%に上り、過去には雲仙普賢岳噴火災害^(注1)で120～140人に対して設置されていた仮設トイレが1基という状況に陥り混乱を招いたという事例もある⁽⁸⁾。仮設トイレの設置数が不足すると、避難者自身の体調にも大きな影響を及ぼし、トイレへ行く回数を減らすために食事や飲み物を減らすといった行動をとる人も少なくない⁽⁹⁾。このような事態を防ぐためには、仮設トイレ以外に使える携帯トイレ、簡易トイレの備蓄が必要となる。以下は大阪府大東市、奈良県の御所市、橿原市の3都市の人口と備蓄している緊急時用のトイレの個数である。人口によって必要なトイレの備蓄数は異なるが、御所市・橿原市ではその数が不足していることが分かり、緊急時には混乱することが予想される。

ハザードマップには、救護支援が受けられるまで自活するための非常備蓄品として、水、食料、コンロ、燃料など記されているが、水道、電気などが止まりトイレの使用が不可能になることを考えれば、簡易トイレの備蓄も積極的に促したほうが良いと考える。

発災時の物資供給については、行政は常時すべての備蓄を行うことは困難である。例えば、鳥取市では、発災時の備蓄品を「公的備蓄」「家庭及び事業所における備蓄」「流通備蓄」に区分して対策を行っている。そのうちの「流通備蓄」では市内の事業所と市があらかじめ協定を締結し災害時に物資を調達することになっている⁽¹⁰⁾。このことから市内で災害が発生した場合に備えて、断水しても利用可能なトイレや井戸の数を把握しておくことと、緊急時には協定を締結している行政と事業所がスムーズに連携できる体制づくりが必要とされているということが分かる。

表3 各自治体の備蓄しているトイレ数（2019年）

都市名	人口	仮設トイレ	簡易トイレ	マンホールトイレ
大東市	120362	261	120000	0
御所市	25621	16	27	16
橿原市	121831	51	0	10

このように予備電源の有無、水や食料等の物資の確保状況、収容可能人数等それぞれの避難所及び自治体で異なり、緊急時用トイレの備蓄数の比較からも災害時への備えが決して十分であるとは言えない。

市民への啓蒙という点においては、街中の看板や電柱に防災を意識することができるマークを設置することなども地方公共団体から災害情報を発信していく一つの手段であると考えられる。そうすることで日常生活の一部として住民たちが災害について考えるきっかけを作ることができる。また、住民も非常用持ち出し品の備蓄、家庭内備蓄の促進、緊急時の集合場所について家族で話し合うなど家庭でできる災害対策を促進することで市や町全体で災害に備えるという意識を高めることができる。

4. 学習活動の概要

本調査では出会った被災者の人たちが「誰も死んではいけない」と述べていたと前述した。その中の一人である陸前高田市の金賢治教育長は、学校で行われている防災教育について「学校にいる子どもたちを災害から守るだけの防災教育」ではないかと指摘している。これは震災によって突然親や家族を亡くするという経験をし、喪失感の中で生きていかなければならなくなってしまった子供たちをたくさん見てきた金氏だからその言葉である。

そこで、ハザードマップの情報を読み解くことにより、日常生活の中で自分ができる防災について考える学習活動を提案する。本活動では自分たちが住んでいる地域と自然災害の関連、普段からの防災について考えられるような学習内容で構成する。

本単元は、小学校学習指導要領（平成29年告示）の特別活動、学級活動内容(2)ウ「心身ともに健康で安全な生活態度の育成」に位置付け5学年で実践する。

特別活動（学級活動）指導案

単元名（対象学年・教科）	自分もみんなも「助かる」ために（小学校5年 学級活動）	
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の被害について理解する。 【知識・技能】 ・ハザードマップの検討や情報を読み取ったりして、家の防災について考えることができる。 【思考・判断・表現】 ・災害に備えて家族と話し合い、生活に生かせるように考えている。 【主体的に取り組む態度】 	
ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
①自然災害発生時の被害について知る。 ②ハザードマップの役割を知る。	①ハザードマップを読み取り、防災に役立てることができる。 ②自然災害を自分事として捉え、考えを分かりやすく発信することができる。	①命を守るために普段からできることを考えている。

表5 単元の概要(2時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	
1時間	1.日本ではどんな災害が起こるだろう。 2.住んでいる地域ではどんな災害が予想されているのか発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○自由に発表させる。 ○茨城県水戸市の水害映像(YouTube) https://www.youtube.com/watch?v=I8MMYHn_D-Y ○ハザードマップが自治体から配られていることに気付かせる。 	ア①
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> ハザードマップの情報を読み取り、自分の家の防災を考えよう！ </div> 3. ハザードマップからわかることを発表する。 ・浸水深、浸水範囲 ・地震の揺れ ・避難所の位置 ・備蓄品、持ち出し品 ・避難経路 ・行政からの呼びかけ	<ul style="list-style-type: none"> ○自宅や学校の位置、想定被害や範囲を確認する。 ○家からの避難先及び道順を確認させる。 ○避難経路と家庭内備蓄に注視させる。いろいろな情報が記載されていることに気づかせる。 ○災害に備えて家の備蓄品を調べさせる。(家で聞き取り) 	ア② イ①
1時間	4. 調べてきた家の備蓄品を発表し、他に必要なものがないかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○生活で必要不可欠なものを考えさせる。断水とトイレ、停電と暖房機等普段あまり考えていないところにも気付かせる。 	イ①
	5. 地図の見やすさや載せてほしい情報はないか話し合い発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○自分が情報を読み取るときに分かりにくかったことや改善してほしいことも発表する。 	イ②
	6. 自分たちが普段からできる防災について、話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○家族と避難について話し合う機会を持つことの必要性に気付かせる。 ○災害情報を得て避難行動をとる大切さに気付かせる。 	ウ①

5. おわりに

令和元年度の陸前高田市文化遺産調査の一環として、正徳寺の千葉了達氏から聞き取りを行い、それらをもとに普段の生活の中でできる防災教育を提案した。

千葉了達氏は、避難所として開設した経緯を述べられると共に、避難所として成り立った理由を①山から水を引いていた②プロパンであった③トイレが使えたことを挙げられていた。③のトイレが不自由なく使えることは、避難生活をするうえで重要なことである。

身近な情報源であるハザードマップを丁寧に読むことにより、記載されている非常備蓄品だけでよいのか、他に記載する情報はないのか、形に工夫点はないのかなど、ハザードマップをより良くするために見直していこうとする力を培いたいと考えた。そして、各家庭の家庭内備蓄も含めて、防災について考えるきっかけともなるものにしていきたい。

注

- (1) 普賢岳は長崎県の島原半島にあり、噴火により島原市、南島原市深江町に大きな被害をもたらした。普賢岳の噴火は、1990年11月17日に198年ぶりに始まり、1995年5月に終息宣言が出された。その間噴火を繰り返し、火砕流や土石流で多くの被害をもたらした。特に1991年6月3日に発生した最大規模の火砕流では、43名もの人が亡くなる大惨事となった。

引用参考文献

- (1) 陸前高田市(2014), 陸前高田市東日本大震災検証報告書, p85
- (2) 川崎貴寛(2019), 近畿 ESD 成果発表会・実践交流会, pp68-71
- (3) 鈴木康弘編(2019), ハザードマップの活かし方, p203
- (4) 千葉望(2012), 共に在りて, 講談社, pp200-202
- (5) 内閣府(2016), 避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン, p10
- (6) 奈良県御所市市民安全部生活安全課 防災ハザードマップ
<https://www.city.gose.nara.jp/0000000050.html>
大阪府大東市危機管理室大東市総合防災マップ
<http://www.city.daito.lg.jp/kakukakaranoosirase/kikikanri/daitomap/1461649443638.html>
兵庫県朝来市防災マップ
<http://www.city.asago.hyogo.jp/category/8-5-0-0-0.html>
陸前高田市津波防災マップ
www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/bousai-syoubou/bousai/map/map.html

- (7) 仲村幸奈・櫛乃里花・上田薫(2018)「陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (8) 一自ら考え行動する力を育む ESD 防災教育 気仙小学校の避難から一, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 第5号, pp237-238
- (8) 内閣府(2016), 避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン, p9
- (9) 同上, p2
- (10) 鳥取市(2016), 鳥取市備蓄整備計画, p1

(出典：奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要 第6号, 2020年3月)

制作年代

室町〜江戸時代（一六〜一九世紀）

伝来

正徳寺（真宗大谷派）本堂内陣左脇壇に安置される。
小友浦の対岸の砂浜に打ち上げられ、他宗在家に安置された後、夢告により正徳寺に奉納されたとの伝がある。

備考

一、聖徳太子像としては南無仏太子像・童子形（孝養）太子像・聖鬘経講讃像などの類型があり、本像は童子形（孝養）太子像で、『聖徳太子伝略』に語られる用明天皇二年（五八七）、用明天皇不予に際して香炉を擎げて祈請する姿を表している。類似する立像は埼玉・天洲寺像〔鎌倉時代・寛元五年（一二四七）銘〕をはじめとして中世〜近世に数多く造立された。本像はもともと一般的な像容を簡略化した造形になるが、8字形（瓢形）を呈する角髪が、北上市・個人蔵（内太子堂）聖徳太子立像〔像高八三・〇cm。南北朝時代・嘉慶三年（一三八九）銘〕や花巻市・延妙寺聖徳太子立像〔像高四九・五cm。室町時代・享祿三年（一五三〇）銘、信定作〕のように南北朝時代以降の岩手県域に類例を見出すことは留意される。この角髪の形状は平安時代後期（一一世紀）の兵庫・一乗寺聖徳太子画像（聖徳太子及び天台高僧像のうち）とも一定の類似を示し、具体的に系譜を辿る作業が残されとはいえず、古い聖徳太子画像に範をとった可能性が示唆される。本像は正徳寺にとつては客仏との伝があるが、本尊阿弥陀如来立像の左脇壇に安置され、聖徳太子を救世観音の化身とみなす考えも相俟って阿弥陀脇侍としての観音菩薩の配位と二重写しになっており、真宗寺院の尊像安置形態としてふさわしいものである。

二、実査 令和元年九月十五日。

（山岸公基・北将伍・濱松佳生・平山あかり・村上朋）

聖徳太子立像

岩手県陸前高田市小友町字両替六九 正徳寺

木造 彩色 一軀 像高七六・〇cm

法量(単位cm)

像高	七六・〇		
髮際高	七三・〇	頂―顎	一四・六
面幅	七・五	角髮張	七・〇
面奥	一〇・六	胸奥	一一・五
裾張	二〇・八	沓先奥	二〇・八

形状

髪を角髪に結う。角髪は鬘が中段で緒を締める8字形(瓢形)を呈し、髪の末端を筆先状に垂下する。盤領の袍と裙を着け、袈裟をまとう。袈裟は左肩の前後で带状の紐で吊る。両腕を屈臂し、右手は掌を仰ぎ左手は掌を伏せて、柄香炉の柄を握る。裙の打合せはいずれが上層か不明。沓を履き、両足をやや開いて立つ。

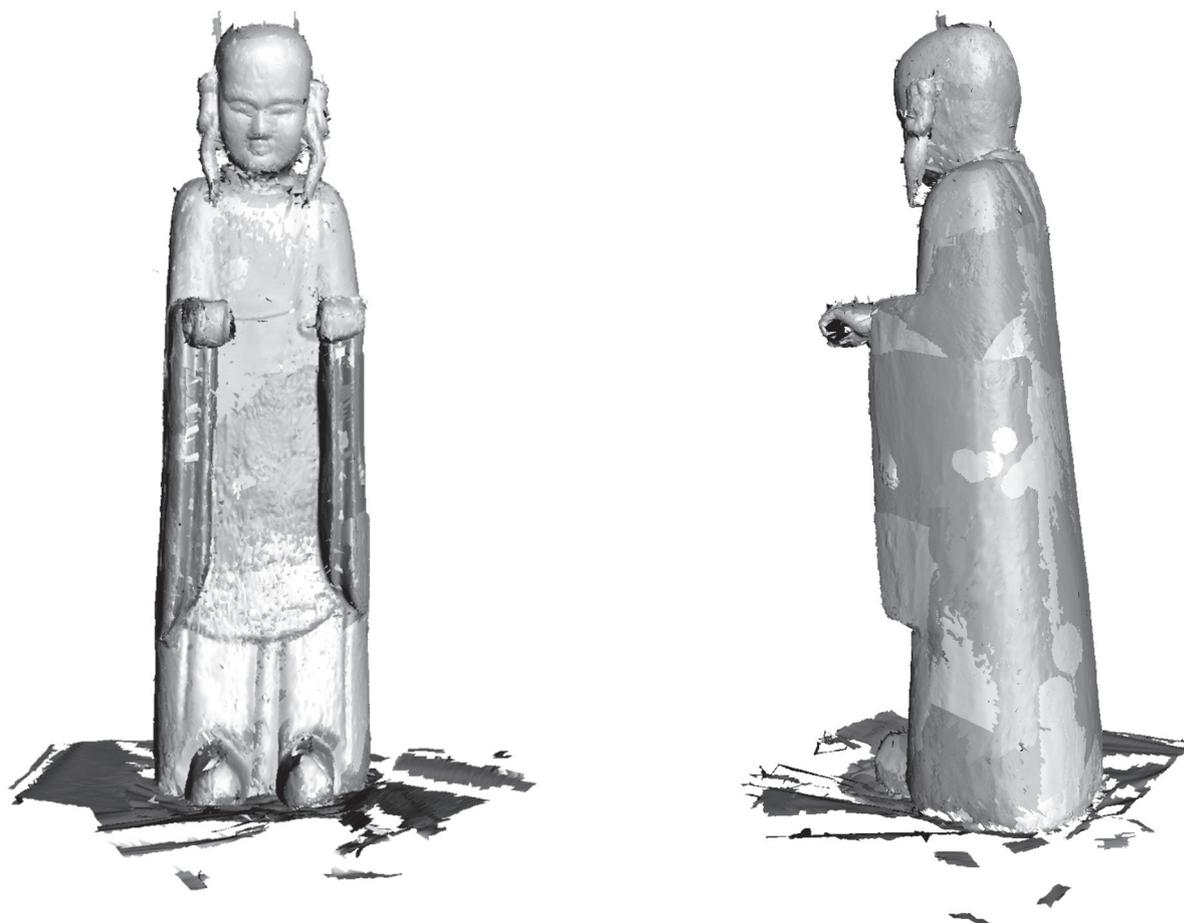
品質構造

木造(広葉樹か)彩色。

頭体幹部を通して一材より彫出か。体幹部材は像底で左沓の後方に木芯を有する。内刳は像底に及ばないが、背面中央襟下に方形の別材部があり、同部内には内刳を有する可能性が高い。この内刳は干割の防止や重量の軽減には有効と考えにくく、納入品もしくは像内銘等に関わるか。両角髪(垂下する髪末端を含む)と両手先、別材。左肩の前後の带状の紐は紙製である。白地彩色。



正徳寺 聖徳太子立像 全身正面3D直交ビュー（左図）・全身正面3D遠近ビュー（右図）



正徳寺 聖徳太子立像 全身正面3D位置合せ完了（左図）・全身左背斜側面（右図）



正徳寺 聖徳太子立像 上半身部分スキャン



正徳寺 聖徳太子立像 上半身右斜側面（左写真）・上半身正面（右写真）



正徳寺 聖徳太子立像 像底（左写真）・上半身左側面（右写真）



正徳寺 聖徳太子立像 全身右側面（左写真）・全身左側面（右写真）



正徳寺 聖徳太子立像 全身背面（左写真）・全身左側面（右写真）



正徳寺 聖徳太子立像 全身正面

岩手県陸前高田市正徳寺
聖徳太子像調査報告書

2020年3月
奈良教育大学

令和元年度 近畿 ESD コンソーシアム
奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

令和2年3月31日

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

次世代教員養成センター ESD・教材開発領域

TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）